

1930年代の米国金融改革法とフォードイズム

市岡 義章（千葉経済大学短期大学部）

第二次世界大戦後から 1970 年代前半期までの先進資本主義諸国は、「黄金の 30 年」と称せられる、マクロ経済の優れたパフォーマンスを達成した。それを可能としたのは、レギュレーション・アプローチに拠れば、「フォードイズムの蓄積体制」である。

「テラー主義＋機械化」に基づいた労働生産性の上昇は、高い賃金シェアの確保と相俟って大量生産・大量消費の高度産業社会を実現したのである。実体経済におけるかような資本の好循環は、金融経済においては、いかような在り方を示していたのだろうか。本報告では、戦後の米国経済に焦点を当て、分析を試みたい。

ミンスキーの「金融不安定性仮説」に拠れば、債務主体である企業のキャッシュフローの状態によって債務履行の実現可能性が決定され、この実現可能性の程度如何に金融の脆弱化の契機が見出される。かれは、脆弱性の基準を「安全性のゆとり幅」にもとめ、負債比率、流動性比率、利払い負担比率などを指標に挙げている。フォードイズム期においては、これらの指標が示す「安全性のゆとり幅」はいずれも大きく、安定した金融環境が実現されたのである。その根拠は、フォードイズムの蓄積体制がもたらした、高い利潤率と実質賃金率そして低いインフレ率にあった。そして戦後の金融制度はこのような金融環境の「健全性」を維持しつつ、資本蓄積の不可欠の構成部分としてフォードイズムの蓄積体制を支えたのである。

戦後のアメリカの金融制度の骨格は、1930 年代に成立した一連の金融制度改革法によって形成された。それらは、銀行業務と証券業務の分離をはじめとする業態の棲み分け、金利の規制、連邦準備制度 FRS の権限強化、連邦預金保険公社 FDIC の設立、の 4 点に要約されよう。銀行・証券の分離は資本信用を証券市場から隔離することによって貯蓄・投資の確実なチャンネルを確保した。金利規制は安定した金利体系を構築することによって、信用（とりわけ「資本信用の第一形態」）の円滑な履行を保障した。また FRS の権限強化は、政府の財政政策とリンクした貨幣供給を通じて、貨幣制約を緩和し企業のキャッシュフローの安定性を支えた。そして FDIC の設立は戦後の米国の金融システムに対する信頼を担保した。このようないわば「頑強な」金融制度と金融構造を土台に、フォードイズムの好調な資本循環の成立が可能となったのである。